

# 大分の史跡 — 築山古墳 —

つきやまこふん さがのせき こうざき ぜんぼうこうえんふん  
築山古墳は、佐賀関半島北西海岸部の神崎の高台に、5世紀前半に造られた全長90mの大型の前方後円墳です。昭和7年(1932)、2基の箱式石棺が発見され、人骨とさまざまな副葬品が出土しました。これらの遺物は5世紀の古墳文化を伝える重要な歴史資料であることから、昭和11年(1936)に国の史跡に指定されました。

## 女性首長とヤマト王権

2基のうち1号石棺の中央には、右腕にイモガイの貝輪をはめた女性の被葬者が納められ、その頭上には銅鏡が置かれていました。それとは逆向きに長大な鉄刀を携えた男性の人骨と、女性と思われる小柄な人骨も埋葬されていました。また、鉄製の武器や農耕具など多種多様な遺物が、副葬品として納められていました。

この地域は、後に海部郡として位置付けられたことから、そこに住む人々は海の仕事をなりわいにし、優れた航海術をもってヤマト王権において重要な役割を担った技術集団だったと考えられています。埋葬されていた中央の人物は、その女性首長であったとみられています。



出土した貝輪



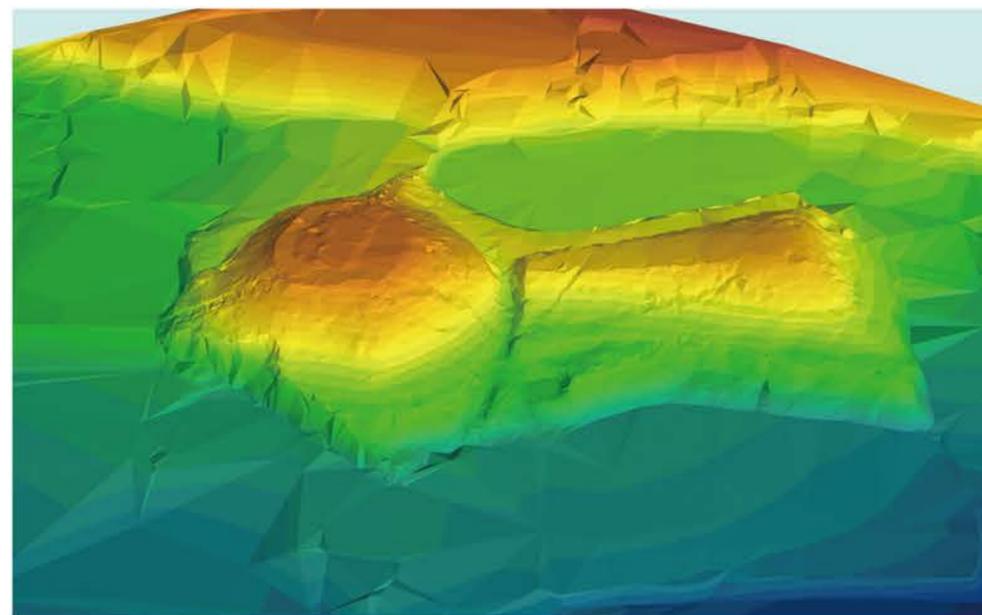
出土した銅鏡



1号石棺内部発掘直後見取り図(昭和8年)



現在の築山古墳



築山古墳CG図(別府大学作成)

## 大切にされてきた石棺様

古墳は、大きな開発を免れ、1600年の間、盗掘を受けていませんでした。

石棺が発見されて以降、古墳は地元の人々から「石棺様」と呼ばれて崇敬を集め、秋になると「石棺様まつり」が盛大に催されています。



石棺様まつりのようす



築山古墳周辺地図